

# 「口」の慣用表現

## —メタファーとメトニミーの相互作用—

田中 聰子

キーワード 慣用表現、連続性、メタファー、メトニミー、相互作用

### 1 はじめに

#### 1.1 慣用表現について

本稿では、身体部位語「口」を含む慣用的な表現を取り上げ、できるかぎり包括的な記述を試みる。従来、慣用句ないし成句と呼ばれるものは、その意味が構成要素の意味から予測しにくいことから、言語研究の対象となりにくい傾向にあったので、このような試みには意味があると思われる。

認知言語学では、言語を現実世界の反映としてではなく、人間がそれをいかに認知し解釈しているかを反映するものと捉える。この観点から見れば、通常の言語表現もいわゆる慣用句の意味も、現実に対する我々の捉え方・解釈の反映として連続的に捉えられる。

本稿では、国広（1997）が区別する「成句（慣用句）」と「連語」、さらには多義語の語義との連続性を重視する立場<sup>1</sup>から、「慣用表現」という用語を用いる。ここで慣用表現とは、その構成語の基本的な意味（典型例あるいは日常の身体経験に基づいて早い時期に習得される意味）から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を表現全体として表すもので、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している表現を指す。そのようなものではあっても、慣用表現の多くは、構成語の意味からある程度の動機づけが可能である。また同じ語を中核とする一連の慣用表現は、かなりの体系性を示すと考えられる。

本稿では身体部位語「口」を含む慣用表現を取り上げ、慣用的意味の有契性と体系性を明らかにしつつ、その有契性と体系性を支えているのが、我々の認知システムとしての概念メタファーと概念メトニミーの働きおよびその両者の相互作用であることを示す。その相互作用の中心となるのは、メトニミーがメタファー成立の基盤を提供するという作用である。

具体的な分析に入る前に、まずこうした概念について次項で簡単に確認しておきたい。

## 1. 2 認知システムとしてのメタファーとメトニミー

Lakoff & Johnson (1980)、Lakoff (1987、1990、1993) などによって、まず認知現象としての概念メタファーの重要性が指摘され、その深さと広がりが見出されてきた。その要点は、メタファーとは単なる言語表現の問題ではなく、我々が世界を理解し認識する際の本質的なやり方なのだという点にある。

Lakoff (1990:45-46) によれば、概念メタファー（以下単にメタファー）とは、「例えば愛といったある経験領域を、それとは全く異なる旅といった経験領域の観点から理解すること」である。この「経験領域」は、見方を変えるなら、「概念領域」でもある。

メタファーに少し遅れて、概念メトニミー（以下単にメトニミー）も、我々が世界を認識する際の本質的なあり方として注目されている。Feyaerts(2000)の分類によれば、これまでに提起されたメトニミーの定義方法は大きく二つに分けられる。その一つは「関係」を重視する立場で、レトリックの伝統を受け継ぎ、メトニミーの基盤を二つの実体（指示対象あるいはその概念）の現実世界における隣接関係に置く。もう一つは認知言語学の流れの中で出てきたもので、メタファーが異なる経験領域間の写像（概念的投影）であるのに対し、メトニミーを同一の経験領域内での写像とする「領域」重視の立場である。しかし問題は、設定の仕方次第で領域の範囲が変わってくるという点にある。領域をどう設定するかについては、明確な基準が提起されているわけではない。そこで同論文はメトニミーを、類似関係以外のすべての関係に基づく写像として定義し、この関係の違いによってメタファーから区別することを提案している。

この問題について、本稿の立場は以下のようなものである。複数の実体間に関係を認識することと、それらを一つの経験領域に属するものとみなすこととは表裏の関係にあり、「領域」を見るか「関係」を見るかは視点の相違にすぎない。ある複数の実体あるいは事態の間に、我々が何らかのつながりを見出してそれらを結びつけ、一つのものとして認識するか、それとも特につながりを見出すことなく、別々のものとして認識するかは、ある言語共同体の多くの成員が共有する文化モデル（あるいは民間モデル）の問題である。文化モデルは、おおまかに言えば、現実を認識する際に当然の前提として無意識に受け入れられているものの見方・捉え方である。言語の意味を、言語使用者のものの見方・捉え方の表れであるとする認知言語学的な立場からすれば、言語は当然文化モデルを反映するはずで、言語事実に基づくかぎり、領域の設定が恣意的にすぎないとは言えない。

Radden & Kövecses (1999:19-21) は、Langacker (1993:30) による参照点現象としてのメトニミー定義を踏まえ、「同一の I C M (理想的認知モデル) 内

で、ある概念的実体が参照点となって別の概念的実体に心的にアクセスすることを可能にする認知現象」として、メトニミーを定義している。本稿でもメトニミーをこのように理解する。すなわちメトニミーが生じるとき、そこには一つのまとまった複合概念が存在することが前提となっており、そのある要素の活性化は、その複合概念全体の活性化を伴う傾向がある（少なくとも慣用化が進む以前には）ということになる。

メタファーとメトニミーの相互作用は、Lakoff & Turner (1989)、Goosens (1990; 1995)、Barcelona (2000)、Radden (2000)、Feyaerts (2000) などにより指摘されてきた。特にBarcelona (2000) は、メタファー成立の基盤をメトニミーが提供するという仮説を提起している。ただ、議論の論拠となる具体的な分析は、主として英語、ドイツ語など西欧の言語における個々の事例研究にとどまっており、別の言語における別の事例で今後さらに検証していく必要がある。本稿では、Barcelona (2000) の仮説が、少なくとも日本語の「口」を含む慣用表現に関して妥当であることを示す。

## 2 【口の開閉】メトニミーと「口」の慣用表現

### 2.1 【口の開閉】メトニミー

最初に取り上げるのは、構成語の意味からすれば単に〈口の開閉〉という概念だけを表す次のような表現である。

[1] 口をひらく・口をとごす・口をふさぐ（封じる）

これらは、次の実例が示すように、〈言語行動〉を表す慣用表現である。

(1)このまま沈黙を通すべきか、それとも口を開くべきか。

（『狐罨』、185）

(2)高松殿では、千景のことには、誰もが口を閉ざしている。

（『萌一』、154）

「口をふさぐ・封じる」などについても、他者に対する意図的行為であるといった違いはあるものの、〈口の開閉〉概念を通して〈言語行動〉概念を表すのは同じである。具体例は紙面の都合で省くことにする。

口の開閉という行為は、言語行動という複合的な出来事を構成する要素である。つまりこの慣用表現の意味は、〈口の開閉〉を参照点として、それを含む〈言語行動〉という出来事にアクセスし概念化するメトニミーとして生じている。便宜上、ここではこのメトニミーを【口の開閉】メトニミーと呼ぶことにしよう。

注目されるのは、〈言語行動〉という概念が、【容器】のイメージスキーマ<sup>2</sup>、そしてそれと切り離しがたく結びつく容器の外への【移動】というイメージスキーマによって捉えられていることである。

上に挙げた慣用表現では〈容器の開閉〉に焦点が当てられていたが、次のような慣用表現では、容器の外への内容物の〈移動〉(またはその否定)が焦点化されている。

[2] 口から出る (もれる)・口をつく (ついて出る・ほとぼしる)・口を封じる・口止めする・口外する・口ごもる

(3)道長の口から、実資の名前が出た時には驚いたが、(...)

(『萌一』、129)

(4)抑えきれない思いが口をついていた。(『プラハー』上、150)

このほか「口をついて出る・ほとぼしる」なども同様である。

さらに、内容物の外への移動を防ぐ「口止めする」、言語行動の主体の意志が関与する「口外する」という慣用表現もこれに加わる。

(5)「口止めされていることなの。だから、私から聞いても口外しないでね」

(『左手一』、215)

一方で、内容物が容器の外に完全に中にとどまることを通して、言語行動の不成立または不完全な成立を表す慣用表現もある。

(6)「うん…… 何かなあ……」／伊月は、らしくないほど口ごもる。

(『無明一』、146)

口は、それ自体が容器として捉えられるだけでなく、身体という容器の一部としても捉えられている。この場合、口は内容物の移動の目標地点として概念化され、助詞「に」を取る。

[3] 口に出す・口(の端)にのぼせる・口にのぼる

(7)「そんな約束したかね」／と一度はとぼけるが、口に出したことは守ってくれた。(『高台一』、125)

(8)「口の端にのぼせるのもはばかり多いことながら (...)

(『銀河一』 vol.2、31)

(9)根尾谷の大事業が評判になるにつれ、古藤田平八の名も、おりにつけ人の口にのぼっている。(『けもの谷』、114)

以上に見てきたように、【口の開閉】メトニミーは、いくつもの慣用表現の意味を動機づけるとともにそれらを相互に結びつけている。次は、これとは異なる種類のメタファーと考えられる一連の慣用表現を取り上げる。

## 2.2 〈言語行動〉へ：表現全体のメタファー

次に挙げる慣用表現にはメタファーが含まれている。

[4] 口がかたい・口がほぐれる・口をわる・口がかるい・口がおもい・  
口がすべる（口をすべらす）・口走る

これらの表現は全体として〈言語行動〉を表している。つまりここでは、「口」の概念についても、「かたい・わる・かるい・おもい・すべる・走る」といった語の表す概念についても、身体部分という物理的な概念領域から、言語行動という異なる領域へのメタファー的投影が見られる。これらに共通するこのメタファーは【口の開閉】メトニミーに支えられており、各表現に固有のより特定の意味は、この基本的メタファーの上にさらなるメトニミーやメタファーが作用した結果として分析することができる。

まず「かたい」という表現は、基本的意味としては、加えられた力に対する抵抗が大きいことを表す（榎山（1994）の分析参照）。容器であれば、開けようとして加えられる力への抵抗が大きい、したがって開けにくい（特に他者によって）ということになる。そこで「口がかたい」は、「他者によって口を開かせることが困難」という概念を表すことができる。

ここに【口の開閉】メトニミーが作用すれば、「容易には言語行動を行わない」というメタファーの意味が生じる。「口がかたい」の慣用的意味「（文脈上重要なことに関して）言語行動を容易には行わない」は、これにさらに価値判断や意志に関する限定が加わったものとして動機づけられる。

(0) 佐々木は口のかたい男だ。生命をかけても、山名の名前を黙秘するかもしれない。（『鍵の—』下、99）

「口をわる」はこれと密接な関係にある。「わる」の基本的意味は、かたい物体に強い力を加えて二つ以上の部分に分けることであり、したがって「口をわる」は、他者からの圧力により自らの意志に反して口を開く意味となる。さらに【口の開閉】メトニミーの作用により、「自らの意志に反して言語行動を行う」というこの慣用表現の意味が生じてくる。

(1) 一気に無理押ししても、口を割る相手ではないと見きわめたのであろう。（『鍵の—』上、186）

「口がほぐれる」という慣用表現についても、強制的か自発的かという違いはあるものの、同様の動機づけができる。

次に「口がかるい・おもい」という慣用表現を見てみよう。

「軽い・重い」という概念が物体の重量の領域から動作の遅速というより抽象的な領域へと投影されるメタファーは、日常経験される重いものは動きが鈍いという認識から生じる（一側面を参照点として他の側面にアクセスする）メ

トニミーに支えられていると考えられる。

「口がかかるい・おもい」はまず「口を開ける動作が速い・遅い」ことと理解される。その上で、ここでも【口の開閉】メトニミーに基づいて、口を開ける動作の速さから言語行動の速さへのメタファーが生じている。

(12) 公子はとっておきの笑顔で亭主の重い口を開かせようとしている。

(『黄金一』、257)

このうち「口がかかるい」という表現では、より一般的な概念からより特定の概念へのさらなる拡張が生じている。すなわち「言語行動を行うのが速い」という一般的な意味に、価値判断と意志性の面での限定が加わって、「(重要なことに関して) 安易に言語行動を行う」という慣習の意味が生じている。その結果「口がかかるい」は、「口がかたい」と同じ価値尺度の上に並ぶ表現となり、両表現はゆるやかな反義関係に立つ。

(13) 「(...) ところが骨董の世界に住む人は、みな口がかたい。我々警察官を前にすると、普通の人は気持ちが萎縮して口が軽くなるものなんです」  
(『狐毘』、185)

一方「口がおもい」の方は、「言語行動を行うのが遅い」、またはそれに意志性が加わった「言語行動を進んで行なおうとしない」という段階にとどまり、価値判断については慣習的に特定されていない。

(14) 自分に学力があるだけに、成績の良くない子や、口が重かったり、とっさの反応が遅い子の気持ちが十分理解できず、結果として「落ちこぼれ」をつくったり.....

([www.chunichi.co.jp/news2/shasetu/1999072081.html](http://www.chunichi.co.jp/news2/shasetu/1999072081.html))

(15) 「そうですね。だいたい秋田の人間は口が重いのですよ。警察に訊かれねば、何も言わねえすもんね」  
(『はちまん』下、269)

「口走る・口がすべる (口をすべらす)」という表現においても、【口の開閉】メトニミーが口の動作から言語行動へのメタファーを支えている。ただそれに加えて、動作の速さとコントロール不能性とを因果的に捉え、一方を参照点として他方にアクセスするさらなるメトニミーの作用により、十分にコントロールしないで言語行動を行うという慣習の意味が生まれる。

(16) 熱にうなされうわ言に口走るのは、操のことばかりだ。

(『けもの谷』、74)

(17) 僕たちのことは、他言無用だ。わかっているな。下手に口を滑らせたら、貴様が前の夫と自分の子供たちにしたことが、公になる。

(『摩天楼--』、382)

以上に、表現全体としてのメタファーが【口の開閉】メトニミーによって動

機づけられているケースを見てきた。以下では、「口」という語のメタファーとメトニミーとの関係を見ていきたい。

### 3 二つの基本的活動と「口」の慣用表現

#### 3.1 スキーマ的行為動詞「する」との結合：摂食行動と言語行動

他の身体部位語と同様に、「口」にもスキーマ的な行為を表す動詞「する」と結合した慣用表現がある。この形式「口にする」では、動詞がスキーマ的な行為しか表さないにもかかわらず、それより特定の行動を表現全体で表す。すなわち〈言語行動〉と〈摂食行動〉である。

(18)なのに常石さんはお茶もお菓子も口にしようとしなかった。

(『左手一』、238)

(19)このときはじめて妻が、彼女自身の考えを口にする。

(『能の一』、72)

〈言語行動〉についてはすでに見たが、〈摂食行動〉もまた【容器】および【移動】のイメージスキーマで捉えられている。口の中への実体の移動を表す次の表現が慣用的に〈摂食行動〉を表す事実からしても、そのことは明らかである。

(20)「(...) 召し上がるものも、信頼できるもの以外は、いっさい口に入れないことですね」

(『鍵の一』下、149-150)

(21)猪害のひどい年は、稗や粟すら満足に口へ入らない。

(『けもの谷』、9)

「口に出す」、「口に入れる」という日常多用される対照的な慣用表現群において、身体部分・口は、ある実体が容器の中へ、あるいは容器の外へ移動するという繰り返し生起する事態を背景として概念化されている。どちらの行動が生じる場合も、身体部分・口はその出来事の最も顕著な要素であり、これを参照点として事態全体にアクセスするメトニミーが生じるのはごく自然である。以下では、このメトニミーが「口」という語の多様なメタファーを支えていることを見ていきたい。

#### 3.2 〈実体部分〉へ：「口」のメタファー

「口」を含む慣用表現の類型として、「出口(入り口)・換気口・窓口・銃口・傷口・(びんなどの)口・川口」から、より抽象的な「宵の口・秋口」といった多くの例が挙げられる。ここでは「口」は、身体部分とは全く別の実体をメタ

ファアー的に表している。しかしこのメタファーを支えているのは、身体部分・口を単独に見た場合の、色彩、形状、質感などといった特性との類似性ではない。

上掲の慣用表現に共通する〈口〉の特徴から、次のような〈口〉のスキーマが抽出できる。

**[5] 〈口〉:より大きな実体の1部で、何かがそこから出るかまたはそこへ入るために通過する部分**

例えば「出口(入り口)・換気口・窓口・銃口・傷口」では、〈口〉はより大きな実体の一部で、人、空気、お金、郵便物、銃弾などが出るか入るかするために通る部分である。「川口」では〈口〉は〈川〉というより大きな実体の一部で水が海へと出ていくために通る部分であり、抽象度の高い「宵の口・秋口」でも、〈口〉は〈宵〉や〈秋〉というそれぞれ一つの実体として捉えられたものの中へ人(経験者)が入っていくために通過するところと言える。このスキーマはもちろん身体部分・口にも該当する。

このように、これらのメタファーを支えているのは、摂食・言語行動という日常の基本的な活動を背景として、身体全体との関係から捉えられた口の概念との類似性である。身体全体との関係から捉えられた概念〈口〉は、それが活性化される時概念〈身体〉をも活性化する。ここには部分と全体とが相互に参照点となるメトニミー現象がある。

こうした口のメトニミー的な捉え方が、摂食・言語行動という事態における身体部分・口の役割と、別の事態における別の実体部分の役割との機能的な類似性の認識を成立させ、身体とは別の実体部分についても〈口〉として概念化することを可能にする。すなわち上記表現のメタファーもまたメトニミーによって支えられている。

人間の身体という領域から物体領域へと投影された〈口〉は、松本(2000)が「物体部分詞」と呼んでいるものの一つである。同論文は、ここからさらに文法機能へと意味の抽象化が生じていることを論じているが、文法機能への拡張とは別に、この実体部分としての〈口〉からは、さらなる拡張が生じている。「状況からの脱出口」「問題解決の突破口」などは、もう一段階のメタファーの生じた例であるが、さらなるメトニミーの生じた例としては、次のようなケースがある。

②舞台に出るような芸人になったら、お嫁さんの口がなくなるでしょ

(『高台一』、125)

この例や「就職口」などの「口」は、まずある複雑な実体(例えばある男性の配偶者である状況や、ある企業に雇われている状況といった構造化された抽

象的概念)の一部であって、しかもその実体に近づくための通過点として特に顕著な部分と考えられる。そこで、しばしば起こるメトニミーとして、顕著な部分が参照点となり全体を概念化するようになったものと考えれば、この一連のケースが説明できる<sup>3</sup>。

実際、身体部分である口も、それが属する全体としての身体をメトニミー的に表すことがある。

(23) 「(略) 土地を入手すれば、一人ぐらいの口なら養えましょう」

(『けもの谷』、126)

生存のための食物摂取が問題となるこの文脈では、口はまさしく生存する人間そのものを代表するものである。同様に、結婚や就職の可能性が問題となる文脈では、結婚している状態や雇われている状態への通過点こそが、その背後にある概念全体を代表するほどに重要なものとなると言えよう。

## 4 【言語行動フレーム】と「口」の慣用表現

### 4.1 〈言語行動〉へ:「口」という語のメタファー

表現全体でというより、「口」という語それ自体が、〈言語行動〉を表すと理解される次のような慣用表現がある。

[6] 口をつつしむ・口がうまい・口(が)下手・口(が)達者・口数が多い(少ない)・無口・早口

「口をつつしむ」では、「つつしむ」対象は身体部分ではなく、当然言語行動でなければならない。「口がうまい・口下手・口達者」は言語行動の特に技術的な面に関する表現であって、「口」が表すのは言語行動の概念である。「口数」も、身体部分・口の個数ではなく、言語行動の回数ないし頻度として理解される。「無口・早口」の「口」も同様である。次に実例の一部を挙げる。

(24) 「提督、すこしお口をつつしんでいただきたいですな」

(『銀河一』 vol.8、98)

(25) 「ふん、口がうまいじゃないか。<sup>とし</sup>年齢に似あわず<sup>じよせい</sup>如才ないな」

(『銀河一』 vol.8、65)

(26) もともと口数の多い人物ではなかったが、それがいっそう寡黙になり、朋輩にさえ短く挨拶をかわすだけで、用件以外はめったに口をきかないのである。  
(『けもの谷』、115)

(27) この家には、洋一郎という私より七歳年上の従兄がいた。病弱で、背が高く、無口なので滅多に口をきいたことはない。

(『高台一』、9)

ここに見られるのは、身体部分という領域から言語行動という別の領域へと投影された〈口〉のメタファーであるが、このメタファーは、フレーム、すなわちある出来事の構造化された知識に基づくメトニミーを基盤として生じていると考えることができる。

言語行動という日常的に反復される基本的な出来事については、この出来事全体が一つのゲシュタルトとして理解され、経験から得られたこの出来事に関する知識が一つの構造化されたフレームを形成すると考えられる<sup>4</sup>。フレーム内での概念投影（写像）は、ある実体や出来事の一部を参照点として全体へ、また逆に全体を参照点として一部へと心的にアクセスするといったメトニミー作用である。この場合、【言語行動フレーム】を背景として、概念〈口〉は、〈身体〉概念、〈言語行動〉という概念、またその産物である〈言語表現〉という概念と密接に結びついており、〈口〉が活性化される時、〈身体〉、〈言語行動〉、〈言語表現〉は容易に活性化される。

このように、フレームを背景とするケースでは、メタファーとメトニミーとは分かちがたく結びついており、これをメタファーと見ることもメトニミーと見ることも可能である。しかしもしもメタファーと見るなら、そのメタファーはメトニミーに依拠するものと言わなければならない。

以下では「口」がフレームの別の要素を喚起するケースを見てみよう。

#### 4.2 〈言語表現〉へ：「口」という語のメタファー

次のような慣用表現では、「口」という語自体が〈言語表現〉を表すと理解される。

[7] 口をはさむ・口をそえる・口を出す・口をきわめる・口がすぎる・口ほどにもない・口を合わせる

[8] a ~口をいう・きく・たたく

b 悪口・憎まれ口・減らず口・差し出口・仲人口・タメ口・大きな口・えらそうな口

c 口が悪い・口汚い

まず [7] を見てみよう。「口をはさむ」は、スキーマ的な意味としては、「他者によるひとまとまりの言語表現の途中で自分が言語表現を発する」ということを表す。したがってここで「口」は〈言語表現〉（言語行動の結果である言葉そのもの）をメタファー的に表している。

(28) 「それでさ」と藤田が横から口を挟んだ。 (『はちまん』上、177)

「口を出す」でも同様に「口」は〈言語表現〉を表している<sup>5</sup>。

②9 大人の話に口を出す事も、店内で大きな声を出す事も、子供には禁じられていた時代であった。 (『高台一』、59-60)

「口をはさむ」でも「口を出す」でも、言語行動がしばしば結果として生じる他者への介入という側面に焦点が置かれることがある。特に「口出しする」という形ではその意味に限定される。

③0 「ご夫婦の問題に口を挟むつもりはありません」 (『左手一』、226)

③1 「馬鹿な！おれまで追っばらわれたんじゃなんにもならない。きさまがよけいな口出しをしたからだ」 (『鍵の一』下、188)

これは原因を通じて結果を認識するメトニミーがさらに作用した結果である。「口をそえる」は、表現全体としては「他の人の言語行動に添えて、それと同様の効果を上げることを目的とした言語表現を発する」意味を表しており、ここでも「口」は〈言語表現〉を表す。次の例で「妻」は、「夫」と同じ目的、つまり客の遠慮を取り除く目的の発言をしている。

③2 その夫の自嘲につづけて、背後にひかえていた妻も口を添える。

／「ただ、いたずらなる鉢の木を、お僧のために焚くならば」

(『能の一』、75)

ここでも、【原因・結果】メトニミーによって、言語行動の結果である〈助力〉という側面が焦点化されることがある。特に「口ぞえする」という形ではこの意味に限定される。

③3 もちろん、流刑者の面会には藩庁の許可が要ったが、そこは伝十郎も口ぞえするつもりだった。 (『けもの谷』、171)

「口をきわめる」においても、「きわめる（最高のレベルに上げる）」は表現内容に関わるものであり、「口」は〈言語表現〉を表している。

③4 羽柴屋敷の表で孫七郎をむかえた生駒甚助は、口をきわめて褒めたたえた。 (『有明一』、131)

③5 殊に、離婚の直接の原因となった、曹昂の戦死の際には、口を極めて夫を罵った。 (『公子一』、285)

例は省くが、「口ほどにもない」「口を合わせる」でも同様である。

次に [8] を見てみよう。[8 a] の「～口をいう・きく・たたく」構文で「口」を修飾するのは、常に言語表現を修飾する語句である。したがって「口」は〈言語表現〉を表す。

③6 悪口の言い放題か。 (『銀魔伝』、14)

③7 憎まれ口を叩きながらも、伊月はまんざらでもなさそうに、まだ開ききらない軟らかいつほみを、指先でそとつついてみた。

(『無明一』、87)

この中でも特に「～口を利く」という構文は生産的である<sup>6</sup>。「無駄口・陰口・タメ口・差し出口・いっばしの口」など頻繁に生起するもののほか、次のようにさまざまな修飾語と共起する。

(38)年は十歳だが、大柄なのと大人びた口をきくため、操は十四。五歳にもみえた。  
(『けもの谷』、9)

(39)明子には、勇ましい口を利いていた道長であったが、腰痛はますます酷くなり、寝た切りの状態となった。  
(『萌一』、243)

(40)それがおまえさん自ら後輩の前でヤワな口きいてどうする。えっ！  
(『左手一』、52)

(41)寝台上へ半身を起こした營は、その可愛い顔にも似合わず、平然と血脈ちなまくさい口をきく。  
(『公子一』、83)

また「～口をきく」の中でも慣用度の高いものは、さらなる修飾語句を伴ったり、[8 b]のように構文から切り離しても用いられる。

(42)つつい、容赦ない軽口をききたくもなる。  
(『公子一』、89)

(43)こんなときだからこそよけいな無駄口がききたくなる。  
(『ギフト』、174)

(44)数年前には軽口で通用した言葉も、今は嫌みになるだけだったし、軽口をたたきあう関係に戻れるとも思えない。  
(『左手一』、64)

(45)いつもは上司がいるところでは、伊月に敬語を使う筈である。それがすっかり普段の「タメ口」になってしまっているあたり、彼も精神的にかなりのダメージを受けているのだろう。  
(『無明一』、71)

以上に見てきた〈言語表現〉としてのメタファーも、【言語行動フレーム】として構造化された一まとまりの知識に基づくメトニミーによって支えられている。〈言語行動〉の産物としての言葉、つまり発せられた〈言語表現〉も【言語行動フレーム】の重要な要素だからである。

一個の構造化された知識の総体である【言語行動フレーム】には、【口の開閉】メトニミーも当然含まれる。次の例は、そうした知識体系を背景として自然に理解される。

(46)ケンプが派遣総司令官に任命され、活動をはじめると、ミッターマイヤーは非難の口を閉ざしていた。  
(『銀河一』 vol.5、169)

上で取り上げた例のほかにも、「口」が〈言語表現〉を表す場合がある。

(47)水鳥は裏切ったのだ。彼の口は信用できない。  
(『鍵の一』 下、148)

(48)「まあ、どっちでもいいですがね」／川喜多は言ったが、もちろん気持ちは口とは逆にちがいない。  
(『自白一』、322-323)

このような例についても、ばらばらな現象とするよりは、【言語行動フレーム】

に立つメトニミーおよびそれに依拠するメタファーとして体系的に分析する方が妥当であろう。そうでないとする理由が特に見当たらないからである。

## 5 終わりに

以上に見てきたように、「口」を含む多くの慣用表現は、一見ばらばらに見えるさまざまなメトニミーやメタファーを含んでいる。しかしそれらのメトニミーとメタファーの間には、メトニミーがメタファーの基盤を提供するという相互作用が見られる。慣用表現と言ってもばらばらな集まりではなく、相互に結びついてある程度の体系性をなしていることは明らかである。

もとより慣用表現には分析可能性のきわめて低いものも含まれているため、そのすべてを包括的に説明することはできない。しかし慣用表現の意味が構成語の意味から規則的に予測できないという理由で、多くの慣用表現を分析の対象から外すことは、言語の重要な部分を見失うことになるであろう。さらにいわゆる慣用句と通常の表現の間は連続的であり、その途中のどこかで、分析できるものとできないものとを明確に区別する境界線を引くことはできない。分析可能性は程度問題にすぎない。少なくともこのケーススタディにおいてはそれを示すことができたと思われる。

今後の課題としては、他のさまざまな身体部位語を含む慣用表現を分析し、そこに反映された日本語話者の身体および精神に関わる文化モデル（民間モデル）を明らかにすることである。そうしたモデルは、それ自体も研究目的となりうるが、さらに他言語・他文化と比較する上の重要なデータとして役立つと考えられる。

## 注

- 1 国広（1997：128）は「成句」を分析可能性の点から「連語」と区別し、「連語」が「語と語の結び付きかたは決まっているけれども、全体の意味は個々の語の意味からすぐ分かる」表現であるのに対して、「成句」は全体の意味が「個々の語の意味の総和とは異なる」ものと定義している。国広（1985）、初山（1997）でも同様の区別が見られる。典型的なケースについては妥当な区別であると思われるが、慣用句と連語、またこの両者と語の多義性との関係は連続的で、實際上区別は困難である。国広（同書、156）

が、「手に余る」「手に合わない」「手に負えない」などを、多義語「手」の語義の一つ〈分量・能力〉の範囲で理解できるとして、成句ではなく連語に分類しているところを見ても、成句であると確実に言えるのは、ある意味用法の生起する表現が一つしかない場合ということになる。しかしそのような表現が一つしかないことをどうやって証明するのか。同じ語でも異なる表現の中では意味が微妙に異なることを考えると、一つの意味の境界は曖昧である。さらに、語義の認定は何に依存するかという問題もある。

「手」に〈技能〉の意味があると認定されるのは、上に挙げた表現が存在するからである。つまり語義の認定は慣習的な表現である連語や慣用句の存在に依存している。かくして多義語・連語・慣用句は連続する。

- 2 イメージスキーマは、【容器】【経路】【力】など、日常の身体経験においてたえず生起する単純で抽象的な概念である。これが経験を構造化し、具体的に豊かなイメージの基盤を与える (Lakoff 1987:267, Johnson 1987:29)。これについてラネカーは、経験から生じるというよりも生得的な認知能力であることを示唆している (Langacker 1993:3)。
- 3 「甘口・薄口・いける口」などに見られるメタファーも、この【全体／部分関係】のメトニミーに基づくものとして分析できる。ここに共通する「口」は、〈種類〉、つまり何らかの〈カテゴリー〉の概念を表し、それを修飾する語句がそのカテゴリーを、食物、酒や醤油などのように特定している。この点は「嫁の口」「就職口」でも同様である。
- 4 摂食行動についても同様のフレームが形成されると考えられるが、本文中で触れたもの以外にはこのフレームに基づく慣用表現の広がりが無いと思われるため、ここでは取り上げない。
- 5 「口をはさむ」では、自分の言語行動によって他人の言語行動を二つに分断するという側面に焦点が置かれているのに対し、「口を出す」では、自分の意見を表明することによって質的に会話に参加するという側面に焦点が置かれている。
- 6 修飾語なしの「口をきく」という慣用表現もある。ここでは「きく(利く)」は他動詞として用いられている。現代日本語話者にとっては、「薬が効く・宣伝が効く」のように応用性の高い自動詞「きく」は、自立した慣習的単位として言語知識に含まれているだろうが、ほかに応用例のない他動詞の「きく」は、単独で慣習的単位の地位を占めているとは考えにくい。つまり「薬が効く」などに比べて、「口を利く」は、その全体で言語行動を表す分析可能性の低い慣用表現となっている。

## 参考文献

- 国広哲弥 1985 「慣用句論」『日本語学』4-1:4-14.
- 国広哲弥 1997 『理想の国語辞典』大修館書店
- 松本 曜 2000 「日本語における身体部位詞から物体部位詞への比喩的拡張」坂原茂(編)『認知言語学の発展』317-346. ひつじ書房
- 初山洋介 1994 「形容詞「カタイ」の多義構造」『名古屋大学日本語日本文化論集』2:65-90.
- 初山洋介 1997 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』80:29-43.
- Barcelona, Antonio 2000 On the plausibility of a metonymic motivation for conceptual metaphor. In: A. Barcelona (ed.) *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, 31-58. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Feyaerts, Kurt 2000 Refining the Inheritance Hypothesis: Interaction between metaphoric and metonymic hierarchies. In: A. Barcelona (ed.) *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, 59-78. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Goosens, Louis 1990 Metonymy: the interaction of metaphor and metonymy in the expressions for linguistic action. *Cognitive Linguistics* 1-3:323-340.
- Goosens, Louis 1995 Metaphonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Figurative Expressions for Linguistic Action. In: L. Goosens et al. (eds.) *By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.
- Lakoff, George 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George 1990 The Invariance Hypothesis: is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics* 1-1:39-74. (邦訳: 杉本孝司 2000 「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?」 坂原茂(編)『認知言語学の発展』:1-59. ひつじ書房)
- Lakoff, George 1993 The contemporary theory of metaphor. In: A. Ortony (ed.) *Metaphor and Thought*, 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.

- Lakoff, George and Mark Johnson 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago : University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Turner 1989 *More than Cool Reason*. Chicago : University of Chicago Press. (邦訳：大堀俊夫1994 『詩と認知』 紀伊国屋書店)
- Langacker, Ronald W. 1993 Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4 - 1 : 1 - 38.
- Radden, Gunter 2000 How metonymic are metaphors? In : A. Barcelona (ed.) *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, 93-108. Berlin/New York : Mouton de Gruyter.
- Radden, Gunter and Zoltan Kövesces 1999 Toward a Theory of Metonymy. In : K.-U. Panther, and G. Radden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*, 17-59. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins Publishing Co.

### 引用例出典 (引用順)

『狐畏』 = 北森鴻『狐畏』、講談社文庫／／『萌一』 = 鳥越碧『萌がさね』、講談社文庫／／『プラハ一』 = 春江一也『プラハの春』上、集英社文庫／／『左手一』 = 渡辺容子『左手に告げるなかれ』、講談社文庫／／『無明一』 = 樫野道流『無明の闇』、講談社NOVELS／／『高台一』 = 水村節子『高台にある家』、ハルキ文庫／／『銀河一』 = 田中芳樹『銀河英雄伝説』、徳間デュアル文庫／／『けもの谷』 = 澤田ふじ子『けもの谷』、光文社文庫／／『鍵の一』 = 森村誠一『鍵のかかる棺』、徳間文庫／／『黄金一』 = 半村良『黄金伝説』、講談社文庫／／『はちまん』 = 内田康夫『はちまん』上、角川書店／／『摩天楼一』 = 太田忠司『摩天楼の悪夢』、講談社文庫／／『能の一』 = 杉本苑子『能の女たち』、文春新書／／『有明一』 = 澤田ふじ子『有明の月』、廣済堂文庫／／『公子一』 = 藤水名子『公子風狂』、講談社文庫／／『銀魔伝』 = 井沢元彦『銀魔伝』、中公文庫／／『ギフト』 = 飯田譲治・梓河人『ギフト』、角川ホラー文庫／／『自白一』 = 深谷忠記『自白の風景』、徳間書店

\*引用箇所記号で出典を示したものは、インターネット上の『青空文庫』からの引用である。